

## 甲状腺外科草子 135

### 哲人宰相：大平正芳余話⑦

杉野 圭三

#### 冬の時代（後）

大平は佐藤政権誕生に貢献したが、佐藤栄作は大平を現状の副幹事長のまま留任した。大平自身は「私の後ろに池田さんの顔が見えるのでしょう」と語り、鈴木善幸は「自分と同じ資質をみていたからではないか」と言う。大平は「時には堪え忍ぶことも政治家には必要だ」と親しい記者に語っている。



第一次佐藤内閣（1964年11月9日）



政権の要職から外れた時期に大平は好きな読書と思索にふける時間を得た。

1965年2月、**政務調査会外交調査会副会長**に就任。外務大臣、官房長官経験者からすれば左遷人事だが、大平は引き受けている。

1966年の「**わが党の外交政策**」と題する講演では「外交というものは内政の外部的表現である。内政が確立しないですぐれた外交ができるものではない。何事にも絶対ということがないように、安全保障にも絶対的な安全保障はあり得ない。安保条約の問題にしても軍事的側面はその一面、しかも補足的一面にすぎないのであって、問題をより広い視野から取り上げなければならない」と述べている。すぐれた歴史観に裏打ちされた卓見である。

また、黒い霧事件（1966）では、国民間に政治不信を招いていることを率直にお詫びする一方、「政治家自らが責任と義務を自覚して、その行動に真剣な反省を加えつつ、政治に対する信頼を培っていくことが肝心であり、政治家は検事でもなく、議会もまた裁判所であってはならない。最終的解決は検察当局と裁判所に委ね、その公正な判断と措置にまつべきである」と述べている。

田中角栄はしばしば議員会館に大平を訪ね、世間話などをした。ほとんどの時間を角栄が一方的にしゃべり大平は聞き役となり、1時間の会話の中で55分間は角栄がしゃべったという。

1967年、**政調会長**となった大平は財政硬直

化の3K（コメ、国鉄、健保）問題に取り組んだ。1968年の衆議院代表質問にたった大平は述べた。「硬直化要因を子細に検討すると、その禍根は財政金融の分野にとどまらず、広く制度や慣行の中に深く根を下ろしていることが判然とする。（中略）真の解決の要諦は、言うまでもなく政府の勇断であり、これを理解し受容するであろう国民の英知である。もはや国民は甘い迎合的な政治の姿勢に顔をそむけつつあると私は考える。私は政府に対し、真実は真実として、これを国民に伝え、困難は困難として、これを国民に訴える率直な態度を要求する」

人を褒めることの少ない佐藤栄作が、「江田三郎、大平正芳の順で質問が始まり、演説は人柄で冴えないが、内容は共にいい、特に大平君の出来はすばらしい」と述べた。

また、自民党総務会では生産者米価について、田村元、田村良平総務が次の発言をした。「わが党が農業政策に理解が足りないから、こんな低い米価が議題になっているのだ。大平政調会長などは大蔵省のエリート官僚出であり、農民の生活など知らぬからこんな事態を招いたのだ。ただちに辞職して退席せよ」。大平は無然として席を立とうとしたが、隣の田中角栄に「腹を立てて席を立つ奴があるか、席を立ったらふたたび戻れないよ」と窘められ、大平は反論した。

「両総務は私に、大平は百姓の生活を知らないと言われたが、あなたたち両君とも父君はわれわれの先輩代議士であり、名門の出で裕福な家庭で育った方だ。それにくらべ私は讃岐の貧農の倅である。私は少年の頃、夜明けとともに家を出て、山の中腹にある少ない田圃を見回ったのち、朝いちばんの汽車で通学するのが日課であった。家貧しく学費も少なく、給費生として勉強し、漸く大学を終えたのである。このような大平が農業を知らないといわれることは心外である」

田中角栄は「私の初めて聞いたハラの底に響く大平君の発言だった」と語る。

田村元は慶應大学卒、田村良平は早稲田大学卒で父親は共に国会議員である。大平が少年時代、苦学して国立大学から大蔵省に入った経緯を知り、赤面し恥じ入ったに違いない。

（一甲状腺外科医の徒然なる随想）

2025年5月2日